



同志社人物誌 (18)

森田久万人

今谷逸之助

ような学者肌の人物であって専ら哲学、心理学等を研究して行った。

明治十二年六月より七一雑報の七巻二五号二七号、三二号及三三号に涉り「理学と宗教の関係」という題名の下に同志英学校卒業式の卒業記念講演を載せている。これは科学と宗教の特質と関係を論じたものであるが、この哲学と宗教の関係というテーマは彼の生涯を通じて追求する課題となったのであって、その取扱いは情熱的宗教的でなく、冷静な哲学的思索を以て貫かれ、あくまで実証的である。この意味において森田氏は年少の同級者であった心理学者で、しかも哲学者であった元良勇次郎氏、カント哲学をよくした中島力造氏、そして後に哲学者となった後輩大西祝氏は同一タイプの研究態度をもった同志社人であった。

二

森田氏は明治十四年一月六合雑誌第四号に「学則論」という論文を書いた。ここでは物理学、心理学、法学、政治学、数学等の諸学における普遍的自明なる原則を究明する学的認識方法は、唯心論又は唯物論の一元論では

一

熊本バンドの一人、森田久万人は明治十二年から三十二年二月に生涯を終えるまで同志社で哲学、宗教哲学、心理学を教えた。明治二十五年からは神学校の教頭であった。

彼の思想と信仰とを紹介したい。

明治十二年六月同志社英学校余科(神学科)第一回生として、卒業した。彼は市原盛宏、山崎為徳らと共に同志社教員として学校に残

った。宮川経輝も同志社女学校に留まった。月給はいずれも十五円であった。(熊本バンド研究三九八頁)このうち山崎は明治十四年十一月病没したが、森田は明治三十二年二月同じく病氣永眠するまで同志社教員として働き、他は何れも転出した。

彼は他の熊本バンドの同級生のごとく伝道者にも実業家もならず、しかも同志社以外にも転出したことがない。また性格は質実謹厳で、「石に袴を着せたような人」と言われた

不可能であつて、物体精神の二元論に立つべきことが論ぜられてゐる。これは今日の論理学の一部門をなす学問論に當る。

明治十五年一月六合雜誌(十八号)に「義務の基本を論ず」を掲載してゐる。これは倫理学を論じたものであるが、この学の研究方法には演繹法と帰納法の二種がある。演繹法とは、まず道義上の普遍的法則を掲げて、これを証明するために、人間精神の働きの体系を明らかにし、その実践する方法を見出すにある。帰納法とは人間精神の現象に現われた側面を観察して、行為の根源を明らかにし、道義的法則を確立するにある。(同一七九—一八〇頁)

森田は次号(一九号)に同論文の続篇を書いて、人間精神に義務の意識があるがその成立のためには善惡の行為を可能ならしめる自由がなければならない、とカントの思想を導入し、良心は人間行為を道德法則の基準に照らして、善、惡を決定する。そして人間行為の目的は、多数の人間又は人格の祝福(徳と幸福との一致)を得るにある。と自己の説とカント説との結合を主張してゐる。これはトーマス・リードおよびハミルトンの説に近

い。そしてこの論文における諸理論についてはマーク・ホプキンスの書を参考にすべきことを奨めてゐる。次に述べる森田氏著の「道義学綱領」との関係から見ても、この時代の森田氏は如何にホプキンスやリードらの英米倫理学者の影響を多く受けていたかがわかる。新島、デビス、ラーネッド、グリーンらに刺戟と指導を受けながら同志社英文科余科在学中から英米哲学を独力を読んでいたのではないかと思われる。

三

道義学綱領理論篇の始めに道義学の定義を下して「仮に道義学を義務を教示するの学科なりと言はんか、さらば義務とは何ぞや、又学科とは何ぞや、此二点を説かざれば其意を了解する事ははざるべし、此義務の事は又他の語にて為すべし、為すべからずと云う感覺にして、通常人々が行為の上にて承認する処なり。」(二頁)と述べ、次に学科について説明して、「第三点の学科とは何のことにてても規律正しく説き明す事なれば、茲に理法あれば其性質を解き、事實はそのまま之を記載し而して理法を以て實際に適用すること等を学科

と言ふ。道義学に於ても他の学科の如く道義の理法と其適用を教示するものなり。英國のペーリー氏は道義学は人間の義務と其義務の発する理由とを教ゆる学なりと解し、米國のホプキンス氏は人間の無上目的と其目的を達するの道を教ゆるものなりと説きたり、二学士の言語こそ異なれども其意は同一轍にして能く道義学の定義を下したものと云つべし。」(二頁)このような書き出しで、倫理学を述べているのであるが、所論の順序構造はホプキンスの「基督教倫理学」(The Law of Love and Love as a Law or Christian Ethics)の体裁に従ひ森田氏の倫理学を論じてゐる。百二十頁の書である。

この書の内容については筆者は既にキリスト教社会問題研究(七号一九六三、四)及び「熊本バンド研究」において或る程度まで述べたことがあるからここには余り詳しくは書かない。しかし、この書を森田氏は著者名も附さず発行年月日も書かずに「三条商報会社」というところから出版した。森田氏としては恐らく神学科学学生の教科書として著したのであつて世間又は学界に発表する積りはなかつたであらう。しかし、この時代における基督

教倫理学としては小冊ではあるが纏つたしかも学問性をもつものである。

われわれはこの書と先述の論文において、

ホプキンスからの大きい思想的影響を見るのであるが、ホプキンスの先述の「基督教倫理学」の外に、英国倫理学者ペーリーの道徳義務 (p.9) 正義 (p.7) 慣習 (p.165) サムエル・クラークの義務の根拠 (s.13) ヘーブンの正義と不正 (p.19) ハミルトンの功利説 (p.10) 意志説 (p.45) 選択説 (p.70) 等の説の批判と共に、カント善意志論 (p.9) 道徳理性 (p.386) 等々の学説が論ぜられているが、森田氏の「道義学綱領」ではこれらが充分批判、消化、摂取せられている。

なおこのホプキンスの *The Law of Love and Love as a Law or Christian Ethics* の原書は明治十年度の英文余科 (神学科) の教科書に使用せられ、金森通倫氏も愛読したことをあるところで語っている。なおこのホプキンスは新島襄氏が一八七四年アメリカン・ボードの年会において宣教師に任命された時の総会議長であり、当時ウィリアムス大学の総長をしていた。森田氏の使用したのは一八七五年の同書第七版である。新島氏が同志社

で修身科の教科書として使用したものと思われる。

四

明治二十年六合雑誌七五号に「哲学の目的及範圍、哲学の彙報」という論文を載せている。ここではギリシヤ哲学からヘーゲル・ロツェ、ハミルトンまでの哲学史を瞥見し、哲学は物質、宇宙、生物、社会等の事物の全体が成立する真理を究める学であるから、単に神、心靈、倫理等の無形のを扱う形而上学であると規定するのは皮層な見解であると述べている。その文中に曰く、

「先づ吾人の心得るべきことあり、第一は近世欧州哲學家中第一流の教説に通曉すること例えばカント或はロツェの如きもの。或る人はヘーゲル、スペンサー、ハルトマン等というものあらんなれども此等の説は哲学史に由りて学ばば可なり。第二は哲学史を通読するを要す、……英語にて初步に適當なる哲学史は『シュヴェグレル』、古今哲学史は『パウオン』近世哲学史『ワイベルヴェク』等なり。第三諸哲學家の批評を読むべし、『ミル』氏哲学批評には『マッコッシー』氏の『本元真理

論』スペンサー氏哲学批評には『パウオン』氏のスペンサー氏哲学及第一主義探究。』(一〇八頁)等である。

この一言によつて、森田氏のカントや、ロツェを重んじ、ヘーゲルやスペンサーを輕視するかのとき態度が見られる。

五

同志社では早くからスペンサーの無神論には批判的であつた。明治十四年六月に山崎為徳氏が「天地大原論」を著してスペンサーの無神論とダーウインの進化論の批判をした。

この書はその英文序文を見ると著者は J・D・デビスと山崎の共著である。神学教授のデビスが当時のニュー・イングランドの神学者バウン (B. F. Bowne's Review of Herbert Spencer's philosophy.) 及び同氏の *Studies in Theism* 心理学者ホール (Stanley Hall's *The Problem of Human Life*) フィッシャー、フリント氏等の諸著から引用しつゝスペンサーとダーウインの進化論に批判を加えた。著述の動機は当時のニューイングランドの神学者が一般にスペンサーやダーウインの進化論に反対したことに同じニューイングランドの

エール大学出身のデビス教授が呼応してオルソドックス神学の立場から反対したのである。もともと同志社神学校の教授皆が進化論に反対したわけではなく、シドニー・ギューリック教授の伯父ジョン・ギューリック宣教師は神学校で生物学を教えたが、彼はイギリスにダーウインを態訪問して学問的討議をしたほどの進化論学者であった。

また同志社のロッツェ研究は、明治十九年から二十五年頃までいたエドモンド・バックレー氏がまずスペンサーとロッツェの講義をした。

バックレー氏は明治二十三年十月の同志社文学会雑誌三六号に「哲学研究の準備」という一文を寄せて彼の立場を示している。

「哲学を研究するには諸科の万有学、即ち天文、地質、植物、動物、生物の諸科学を既に熟知しおれりと仮定し置かざるを得ず、シャネー氏『終極原因論』(Janet's Final Causes)及スペンサー氏『第一原理』(Spencer's First Principles)を研究せんには、右諸科の学は不断其要する処なり。……加之万有哲学と称する学科を研究し、運動物質及物理学は実に不可欠者なり、過る数十年間にロッツェを

して最も秀越せる哲学者たらしめたるは大に氏の右諸科学に熟達せるに基き、ヘーゲルを導きて今日嘲笑の種子となるる、幻想の域に到らしめたるは、此諸科学を習得せざりしに依る」(四頁)と。

明治二十三年頃の同志社普通学校及び神学校は右のような論理、心理、道義及び自然科学を予備学として、スペンサーの「第一原理論」が講義せられロッツェのミクロコスモスの英訳(Lotze's Microcosmos)が教科書として講義せられた。同時にシーリー訳のシュベグラの西洋哲学史(Schwegler's History of philosophy)ラッド生理的心理学(Ladd's Physiological Psychology)及びシュミット「ダーウイン氏学説(Schmidt's Theories of Darwin 等が参考書又は教科書として使用せられた。(五頁)

森田氏はこのバックレー氏から独逸語を学修すると共にスペンサー及びロッツェ哲学の指導を受け、バックレーに続いてロッツェ哲学を教授した。

森田氏は明治十八年頃には同僚ラーネッド教授について、わが国に始めての経済学の講義を聞き、英文でノートした(熊本バンド研

究参照)。彼は正確な英文を書いた。

六

明治二十二年九月から二十五年六月までエール大学に留学した。従兄弟の原田助(後の同志社総長)と市原盛宏(後朝鮮銀行総裁)と一緒にあった。ここで哲学、心理学(ラッド教授)倫理学、経済学、生理学等を学んだ。また明治二十四年九月から翌年六月まで、同大学で、東洋哲学史の講義をした。そしてこの東洋哲学史によってエール大学よりPHDの学位を受けた。このエール大学で東洋哲学史の講義をし得たのは、その儒教及び和学の学殖の自信を示すと共に彼の語学力の豊かさをも示すものである。優れた英語力は山崎、下村、金森、小崎、海老名、横井等の同期の熊本バンド出身者の共通の現象であって、熊本学校におけるシェーンス教授が独り、四カ年間英語、数学、物理化学、地理、天文測量術等の初等普通学をすべて英書を使用し、たえず試験で競争せしめて鍛え上げた上に同志社で宣教師等によって訓練せられた賜物であって、金森氏が後年欧米及びニュージーランド等を英語説教をもって巡回し成功し

た際の思い出に、熊本洋学校の英語教育の顧
していることによっても充分うかがえるので
ある。

森田氏がエール留学中の一つのエピソード
を紹介すれば、氏はある時旧師ジェーンズ氏
を訪問した。(多分ミシガン州アナバー・バー
であったらう 今谷註)すると旧師は「お前
は今何を勉強しているか」と問うた。森田氏は
「ラッド教授の『生理的心理学』(Physiological
Psychology)をやっています」と答えたところ
「何だ、いふまで dead psychology をや
っているのか」と言われて森田氏は驚いたと
のことである。(今泉真幸氏談)

七

さて、明治二十六年六合雑誌一五二、一五
三、及び一五五号の三回にわたって「宗教哲
学論理法の歴史及批評」の論文を載せてい
る。これはデカルト、ベーコン及びロックの
主著の内容をいちいち述べつつそれをクノ
ー・フィシャー、セス、ヴァント、フレージャー、
クザン、グリーン、ハックスレー、デューイ
ー等の書を用いながら詳しく批判し、同時に
ライブニッツ、バークリー、ヒュームに言及

している。これらの論文は次に書かれた「カ
ントの宗教思想への前奏曲となっている。

明治二十八年六合雑誌一七七及び一七八号
に「カントの宗教思想」を書いた。

「彼(カント)は元来ヴォルフ学派の人、晩
年に至るまで、其式を守り、千思万考、究理心
の満足を求めんとしたりしや明らかなり。今
日より之を察すれば、彼屢々ヴォルフとヒュ
ームとの中間に彷徨ひし跡あり、是れ一見其
弱点なるが如くなれど、其誠実なる、目的と飛
凡なる研究法とを見れば此の疑念は氷解せん
然らざれば「窮理の理性批評」(純粹理性批判
今谷)第二版の序文を了解し得ざるなり、其
文に曰く『神、自由及靈魂不滅の知識を排除
して、信仰に自由の余地を与えんためなり』
と。以て看るべし、その如何に実地的にして
而も人情世道を尊重せしかを。宜べなり、彼
が輕躁浮薄なる懷疑説を弁難せし勲功の、か
の蘇国のリードに優るあるも決して劣るなき
や。……窮理と德行とを区別せしも、スピノ
ザと共に、大いに実地道德を貴めり、又ヘー
ゲルとなく、ひそかに宗教の蘊奥にもまた理
性の氣脈を認めたり。看よ、如何に彼が独断
説と経験説と、理想派と現実派と、予定論と

自由論と、完全説と快樂説とを仲裁せんと勉
めしを」(四六九頁)

この一句を見ても、十八世紀の欧州思想界
の情況に対して正しい知識と洞察をもってい
たか、また、カントと共に英のトーマス、リ
ード、ハミルトン等に対する森田氏の評価の
正當さを窮つことが出来る。

森田氏は続いて純粹理性批判と実践理性批
判の中心的諸問題を論じ、両批判の關係点を
明らかにし更に進んで、理性の限界内におけ
る宗教を論じている。

筆者は森田氏の宗教哲学の立場は明らかに
カント哲学であると言つて過言ではないと思
う。森田氏は明治二十八年七月同志社で行な
われた組合教会第七回夏期学校において「カ
ントの宗教哲学」という講演をしたが、その
内容の詳細な筆書の原稿が残っているが、細
かいところは種々違つたところもあるが、骨
子においてはほとんどこの論文と同じであ
る。こうした形で森田氏は新神学運動の流れ
の中に乗り出したと言ひ得ないであらうか。

(文学部教授・哲学)